

## スズロとソゾロ（その二）

我妻 夕賀子

中古文を讀んでいると、スズロおよびソゾロという形容動詞によく行き当たる。この二語にウ段音とオ段音の音韻交替の違いが見られることは明らかであるが、「どちらが先に使われるようになったのか」とか、「両語に何らかの意味・用法の違いがあるのか」などについては、まだ明確に分かっていない。そこで、これら二語の意味・用法の相違について考察を加えるべく、前号ではまず、スズロを取り挙げた。そして、中古の代表的な『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』という三作品の中で、スズロがどのように用いられていたかを調べ、その結果について詳述した。

以下、今号では、前号を承けた形で、他の中古の作品におけるスズロの意味・用法について見ていくことにしたい。

☆ 中古（承前）

スズロはこれまで、左に記す八つの意味に分けることが出来た。

A . . . . . (目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言い) あてもなくふらふらと、漫然と

B . . . . . (予期に反していやな事態が生じたときの不満な様子を言い) 不本意である、とんでもなくひどい

C . . . . . (じっくりしないで、面白味に欠ける様子について言い) 風情がない、つまらない

D . . . . . (理由なく、自然に進んで行く状態、気持ちを言い) 何となく、わけもなく

E . . . . . (出任せで、筋が通らない様子を言い) いい加減な、でたらめな、他愛もない

F . . . . . (あるべき程度を越えているさまを言い) むやみに、やたらに

G . . . . . (心を引かれることもなく、かかわりのないさまを言い) 無関心な、無関係な

H . . . . . (予期しなかったことが出現して驚いたさまを言い) 思いがけず、意外に

以下、それぞれの意味・用法の特徴をかいつままで述べることにする。

Aは、スズロ二という連用形で、イキイタル(行至)、マドヒアリク(惑歩)などの動詞にかかったり、連体形スズロナルがタビ牛(旅居)という名詞を修飾したりするものである。すなわち、顕著な動きを伴った言葉と共に使われ、「あてもなく」や「ふらふら」との意を表している。

Bは、思わぬことを見たり聞いたりして驚き、その上、不快に感じたときに「不本意である」の意で使うもので、大

部分が連体形用法になる。

Cの「つまらない」の意味を示すものも、ほとんど連体形用法で使われ、しかも、かかって行く語は形式名詞コト(事)である場合が多い。

Dは、B・Cと違って、連用形スズロニで用いられる。そして、かかって行く用言が動詞の場合には、イフ(言)、ナゲク(嘆)、ネンズ(念)などあまり動きの感じられないものに限られている。なお、これはAのスズロニがかかって行く動詞とまさに対照的である。また、そのかかって行く用言が形容詞や形容動詞の場合には、カナシ(悲)、クルシ(苦)、ココロボソシ(心細)、ナミタガチナリ(涙勝)、アハレナリ(哀)など、どちらかというマイナスイメージのものが多く、つまり、自分で制御出来ないうちに進んで行く状態について、その理由がわからず「わけもなく」と用いるもので、下に来るのはほとんどが心情表現の語である。

Eは、主に連体形として使われる。その際、かかって行く体言は人・物・抽象的事項などきわめて種々雑多で統一性がない。意味的には、相手やその行為などを見て、「いい加減な」とか「他愛もない」などと言うもので、非常に意図的、かつ批判的である。

Fは、一種の強調表現で、連用形で使用されることが多い。かかって行く用言は動詞のコフ(恋)、モノウラミス(物恨)、カタリウレフ(語怒)、形容詞のコヒシ(恋)、タカシ(高)などさまざまであり、これと言った特徴は見られない。ともかく、いい意味でも悪い意味でも、程度がはなはだしいときに「むやみに」の意で用いられる。

Gの「無関心な」「無関係な」の意を示すスズロは、すべて連体形で使われ、ヒト(人)、ヲトコ(男)にかかって行く。つまり、特に良くも悪くもない、自分とはかかわりの薄い人物に対して用いるものである。

Hは、Bの「不本意である」と似ている。ただ、Bが、意外性に驚き不快に感じるのに対し、Hは、単に驚いたときに「思いがけず」と使うもので、必ずしもそれをいやなものとはとっていない。

以上、AからHまで大さっぱに意味・用法を見て来たが、続いてこれらが中古の他の作品ではどのように用いられているのかを探ってみることにしたい。なお、前回までの調査では、『伊勢物語』の四例は順に、Aが二、BとCがいずれも一、『枕草子』の一四例はD六、E五、F三とそれぞれ偏った使われ方をしていた。それに対して、『源氏物語』五〇例の場合には、A四、B一、C二、D一七、E一四、F八、G三、H一と、数の多少こそあれ、どの意味もしつかり

用いられていた。

ところで、中古の他の作品については、以下、作別ではなく、AからHの意味別に述べていくことにする。そこで、まず初めに、参照にした中古の作品をジャンル別に挙げておくことにしたい。尚、作品は各ジャンル毎に成立年代順に並べた。また、作品の下の( ) 内には、以後、用例を掲げる折などの略号を記した。(注1)

物語……『竹取物語』(竹取) 『大和物語』(大和) 『落窪物語』(落窪)

『宇津保物語』(宇津保) 『堤中納言物語』(堤) 『浜松中納言物語』(浜松)

『夜の寝覚』(寝覚) 『狭衣物語』(狭衣) 『とりかへばや物語』(とり)

歴史物語……『栄花物語』(栄花) 『大鏡』(大鏡) 『今鏡』(今鏡)

日記……『蜻蛉日記』(蜻蛉) 『和泉式部日記』(和泉) 『紫式部日記』(紫)

『更級日記』(更級)

説話……『今昔物語集』(今昔) 『古本説話集』(古本)

ちなみに、中古の主要作品の中で、スズロが一例も使われていなかったのは、物語では『平中物語』、日記では『土佐日記』『讃岐典侍日記』、そして、説話の『日本霊異記』『三玉絵詞』『打聞集』などである。さらに、『古今和歌集』以下、平安時代末期に成った『千載和歌集』までの勅撰和歌集にもスズロは一例も見出だすことが出来なかった。それでは、右に記した作品の中で、スズロがどのように用いられていたかを、意味グループ別に用例を挙げながら説

明して行くことにする。

まず、Aは総して用例数が少ない。今、左にすべての例を掲げてみることにする。

。おもはじと あまたの人の 糸にすれば 身ははしたかの すずろにて なつくる宿の なければぞ

ふるすにかへる まにまには

△蜻蛉・上・天徳二年七月▽

。その夜より我が身のうへはしられねばすずろにあらぬたびねをぞする

△和泉▽

。いとひがひがしかんべきことなれば、すずろに心地もあくがれまどひて・・・

△寢覚・四▽

。道の空、浪のうへにてすずろにさすらへぬべく思ひわびつ・・・

△浜松・一▽

。「あはれ、よのつねのなからひならましかば、ただ大かたのむつまじきゆかりあさからずとも、すずろに

山ふかくあくがれすごさましや。

△浜松・四▽

。げに住み馴れ給ひぬる山のかげをにはかに立ち離れ、すずろに浮きたる世界に立ち出で給ふを・・・△浜松・四▽

初めの『蜻蛉』の例では、夫兼家の長歌の一部にスズロが使われている。作者右大将道綱母との仲を絶つまいと思ふ兼家は、たえず作者のところを訪れる。「ところが・・・」ということ、そのあとに続くのが右の歌である。

こゝでは、「糸にすれば」が「怨(ゑん)すれば」に同じで、「恨むので」の意となる。また、「はしたか」は鷹の一種を指す。それは、小型の鳥で、鷹狩りに使い、その時、尾に鈴をつけるという。スズロはこの鳥につける鈴(スズ)

と音が共通なところから用いられた語である。つまり、「私の身は、はしたかにつけるスズではないが、スズロであり」となる。お互いの仲を保とうとして努めて作者の許に譲り兼家に対し、侍女達は「愛情が足りない」と言って、兼家をなじる。その時、兼家が自分の身をスズロだと感じるのである。要するに、この場合のスズロは、どこへ行っているのか、どっちつかずで、落ち着きがなく、ふらふらしている兼家の気持ちを表している。したがって、このスズロはAの意味にとるのが適当であるように思う。ただ、Aの場合、普通は動きのある言葉と共に用いられるが、ここではそれが示されていない。しかし、歌の場合は語の省略がよくあり、しかもここでは、「ほかになじみの家とてないので、やむを得ず我が家へもどる始末」という文が続いている。ここから、行き場所が定まらず、ふらふらしている兼家の様子がうかがわれるので、やはりスズロの意はAがふさわしいのではないだろうか。一文は通釈すると、「〔私家〕ガアナタ（作者）ヲ」思ひもしない多くの侍女たちが恨むので、私はあてもなくて落ち着かず、かといってほかになじみの家とてないものだから、仕方がなく我が家へもどる次第」となる。

次の『和泉』の例は、連用形スズロニがタビネ（旅寝）ヲソスルという末句にかかった歌である。そして、このスズロニはタビ（旅）という広範囲に動きまわる語を伴って、Aの「あてもなくふらふらと」の意を表している。以下の『薄覚』や『浜松』の例も、それぞれアクガレマドフ（憧惑）、サスラフ（流離）、アクガレスコス（憧過）、タチイツ（立出）という動きのいちじるしい動詞と共に用いられているので、Aの意味に考えられる。なお、前回の考察で、『源氏』には、タビネ（旅寝）という名詞にかかった連体形スズロナルが一例出て来たが、今回はすべて連用形用法であった。Aの場合、顕著な動きを示す動詞にかかって行くということから、基本的には連用形で使うものだったのではないかと思われる。

続くBも、左記のように用例数が少ない。

。「うたてある主のみもとに仕うまつりて、すずろなる死をすべかめるかな。

△竹取▽

。「すゞろなる酒飲みは衛府司のするわざなりけり。

△宇津保・嵯峨院▽

。宮々もかくてこそはと思ひつればこそ、さてだにすすろなりつるすまひを、宮をば家に迎へ奉らんと思ひしを・  
△宇津保・蔵開下▽

。絳石(ツタ)・鶏冠木(カヘデ)繁リテ物哀レナリ。「此クスズロナル事ヲ見ル事」ト思フ程二・・・  
△今昔・二四ノ三五▽

右は思いもかけないことに驚き、その上、不快に感じる時に用いるもので、スズロの入ったところを解釈すると、順に「不本意な死に方をしなくてはならないようですね」「とりとめなく不覚な酒の飲み方は」「女三宮・中君もこうしていらつしやると思えばこそ、我慢してそれでも気の進まなかった住居ですのに」「このように思いもかけずひどい目に合うこと」となる。最後の例は、前号でも触れた『伊勢』九段と同じ内容の文章である。これら四例からは、いずれもスズロが用いてあることで、予期に反した事態の生じたことを良くは思っていない様子がかがわれる。なお、用法的には前号の『伊勢』や『源氏』の例と同じく、大半が連体形で使われている。(注2)  
次にCも、左に記すように、A・Bと同じで、例が少ない。

。「何事をいかに思すぞ。すすろなること。あるまじき思ひそむるもよからぬわざにこそ。  
△宇津保・国議上▽

。枝の鳥、草木だにまたずともがな、あなすすろや。  
△宇津保・国議中▽

。艶になりぬる人は、いとすこうすすろなるをりも、ものあはれにすすみ・・・  
△紫▽

。おぼつかなくてへたゝる日ころの事などをもさしおきて、すすろなる事を言ひいでて恨みの給ふ。△寢寛・五▽

。又おとなにせらるべきおほえもなく、時々の客人にさしはなたれて、すすろなるやうなれど・・・  
△更級▽

先に見たCの特徴としては、スズロが連体形で使われ、形式名詞コト(事)にかかる例が多かった。右の例も、必ずしもコト(事)ばかりではないが、ヨリ(折)、ヤウ(様)など形式名詞風な語にかかっている。二番目の『宇津保』の例は、スズロナリの語幹に助詞のヤが付いたもので、一語化して感動の意を表している。今回参照した他の中古の作品では、この形式で使われたスズロは全く出て来なかった。したがって、ここは珍しい例となる。ただし、この部分本文がはつきりせずわかりにくい。歌の前に置かれたこの文は、「枝の鳥」と「草木」がそれぞれ、「比翼の鳥」「連理の枝」を寓し、「またずともがな」は「いつまでも待たせないで早く参内してほしい」の意を表していると思われる。そして、続いている歌が、住吉の常磐の松を持ち出して、「心変わりはない」ということを述べているので、スズロは相手としつくり行かないことを慨嘆し、「つまらない」の意味で使っているのではないだろうか。その他の例でもスズロはどれも、しつくりと行かずに心に不満を残し、面白味に欠ける様子について述べているので、Cの意にとつて差し支えないように思う。

四番目のDは、きわめて用例数が多い。まず初めに、さまざまな作品から、いくつか挙げてみることにする。

。世にふれどこひもせぬ身の夕さればすずろにもものかなしきやなぞ

△大和・一九▽

。見侍りしにすずろに心やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思う給へられしか。

△紫▽

。御心に入れて弾き給へる、すずろに聞く人、涙とどまらで、明けぬれば、みかど后返り給ひぬ。

△浜松・一▽

。くれゆく空のみながめられつゝ、すずろに心は騒がれ、あくがるゝ心地すれど……

△寝寛・一▽

。古き賀の歌どもをかかせ給ふに、侍従大納言いみじう書き給へらんも、すずろに笑ましう思ひや、らる。

。「大将が姫君ヲ」うちまばるに、すずろに涙ぐまれてかき抱きて出でたまふ。

△とり・中V

。さてより後、ただすずろに、「物を食はゞや」と思へば、めでたくし据ゑて、きとは得ぬ。

△古本・六八V

Dは、先にも述べたように、連用形スズロニの形で、下に来る用言にかかり、「わけもなく」「何となく」の意を示すものである。そのとき、下の用言は心情表現の形容詞か形容動詞、あるいは、動きの少ない動詞の二つに分けられる。そのうち、形容詞・形容動詞は、悲シ、ナミダガチナリなど、どちらかと言うと、マイナスイメージのものが多かった。右に挙げた中では、最初の二つが形容詞にかかる例である。初めの『大和』の歌は、通釈すると「この世に生きているとはいふけれど、恋する人もいないこの身が、夕方になると何となくもの悲しいのはどうしてでしょうか」となる。つまり、ここでは、自分のことをわざわざ「こひもせぬ身」と表面に出しながら、秋風に托して相手のつれなさを訴えている。そして、スズロニは暗く寂しい感じの形容詞カナシにかかっている。次の『紫』の例は、中将の君の手紙を見て、作者がスズロニ「心やましく」感じたという文である。「心やまし」は、自分より優越していると認めた相手に対して劣等感を覚え、それをこらえている、いらいらした感情を表す。よって、ここでもスズロニは、あまりよくない感じの形容詞ココロヤマシにかかり、一文は「中将ノ君ノ手紙ヲ」拜見しましたが、わけもなく不愉快になって、向かつ腹が立つとか下様の人が言うように憎らしく思われたことです」と訳すことができる。その他、ここに挙げなかった中古の作品で、Dのスズロニがかかっている形容詞および形容動詞を見ると、アハレナリ(哀)、ウシロメタシ(後目)、ココログルシ(心苦)、ハツカシ(恥)など、すべてマイナスイメージの語ばかりである。

続いて、右のDの中で、残る四つは、動詞にかかるスズロニの例である。その動詞は順に、聞ク、(心方)騒グ、思ヒヤル、涙グム、思フといずれも動きの少ない意のものになる。また、ここで注目したいのは『寢覚』『栄花』『とり』の例で、この三つは、それぞれの動詞の下に自発の助動詞ルが付いている。Dは、こちらが意志的に力を加えないのに、

理由もなく自然に進んで行く状態や気持ちを言い、「何となく」となるので、動詞の下に自発の助動詞ルが付いているのは納得が行く。これらは、それぞれ部分的に、「わけもなく平静な心を失って」「何となくほく笑ましく思いやられる」「わけもなくひとりで涙がお出になって」という訳になる。同じように、『古本』の例で、副詞オノツカラがスズロニと共に使われているのも、動作が無作為的に行われたことを強調する、Dの意味ならではの用法と言えるのではないだろうか。なお、その他の中古の作品で、Dのスズロニがかかって行く動詞を抜き出してみると、オボユ(覚)、オモフ(思)、サブラフ(候)、アリナル(在馴)、ミル(見)、ヒラク(開)、フシシツミナヤム(伏沈愼)、ミクラス(見暮)など、いずれも、行動範囲の狭いものが多い。

それでは、続いてEの例を挙げながら、これまでと同じように説明を加えて行くことにする。

。「いとゞうつくしう、すすろにてはいかでみまし」とおもひたてまつり給ひて・・・  
△宇津保・樓上△

。もしこれら貸し給はゞ、すすろならむ人にな賜ひそ。  
△堤・よしなしこと△

。「すすろなる人に心をつけて、ゆゑもなうよしなき事をしいでられたりしよ。  
△浜松・三△

。「あまり世にすぢかひて、すゞろなる山こもりがちに物せさせ給ひ、ひがひがしきやうなり。  
△浜松・四△

。大殿の伏見へおはしましたりけるも、すすろなる所へはおはしますまじきに・・・  
△今鏡・四△

右のうち、初めの『宇津保』の例は、琴をお弾きになる大官を見た仲忠の心内語で、「『これは立派だ。いい加減な扱ひにはおきたくない』とお考えになつて」という訳になる。「いい加減な扱ひ」とは、「粗末な住居にお住まいさせること」で、物語ではここから善美を尽くした楼が完成することになる。次の『堤』では、文中の「これら」が、「足竊一、長むしろ一、つちたらひ一」を指す。よつて、こういうものを「いい加減ででたらめな人に貸してはいけま

「せんよ」ということを教訓的に述べている。三番目の『浜松』を通釈すると、「気分まかせのいい加減な人」「中納言」に愛着して、わけもなくつまらぬ事「衛門督ノ手紙ヲ墨ヲ塗りツブスコト」をしてかきなざっていたことよ」となる。また、もう一つの『浜松』の例は、大將が中納言を評して言う部分で、一文は「とても世間と違ったことをして、筋の通らない山籠りばかりしていらつしやり、ひねくれているようだ」と解釈出来る。『浜松』の例は、二つとも中納言のことを批判的に評していると言える。最後の『今鏡』は、「大殿が伏見へいらつしやつたのも、いい加減ででたらぬ所へはいらつしやいますまいに」という文で、場所の「伏見」を評価している。以上五例、スズロナリは、どれも誠意のこもっていない出任せな人や扱い方、状態、場所などについて記しているの、「いい加減な」「でたらぬ」と訳せるEの意味に当たる。なお、Eは、右に挙げた例の他には、『浜松』にあと二つ類例が見えるだけで、総じて用例数は少ない。さらに用法的には、右に挙げた例からも明らかのように、大半が連体形スズロナルで使われている。続くFは、Dに次いでよく使われている。そこで、まず初めに、なるべく多くの作品から何例か抜き出してみることにする。

。たゞすずろにものかなしく、世には侍るまじき心地のせしかば・・・

△宇津保・国譲中▽

。飽かずかなしき恋のかたみとおもふにまがへる心ちするに、思ひもよらずながら、すゞろに涙もとゞまらず。

△浜松・一▽

。もののみ心ばそく思ひ侍りて、すゞろに心弱きやうになりもてまかるかな。

△寢寛・一▽

。心より外にて過ぐす様などの、すゞろに心苦しく思え侍れば・・・

△狭衣・三▽

。父おとゞはさらなり、よその人だにこそすゞろに感じたてまつりけれ。

△大鏡・道兼▽

。この蔵すゞろにゆきゆきと揺ぐ。

△古本・六五▽

右に記したFの六例はDとよく似ている。ただDは、理由なく自然に進んで行く状態や気持ちについて「なんとなく」と用いるもので、程度について、その強弱を述べてはいない。これに対しFは、良きにつけ悪しきにつけ、通常の程度を越えているときに使い、「むやみに」「やたらに」と訳せるものを言う。一番初めの『宇津保』の例は、スズロニがかかっているモノカナシのモノに、すでに「なんとなく」の意が含まれているので、重複を避ける意味でも、スズロはFにとつた方がいいと思われる。次の『浜松』の例は、涙が「出る」だけでなく、「止まらない」ということなので、やはりスズロをFとすべきであろう。その他の例も、Dと考えられなくもないが、前後の文章から判断すると、スズロの意は、程度のはなはだしさを言うFにとつた方がよりふさわしいようである。右のうち、『大鏡』の例だけは、「父大臣『道兼』はもちろんのこと、他人でさえ『福足君ノ手足ヲトツテトモニ舞ツタ道隆ノ機転ヲ』やたらに感嘆申し上げたことだった」と訳せるので、スズロニは、感シタテマツルという良い意味の動詞にかかっている。このように、種のほめ言葉ともとれる語にスズロがかかっているのは、これまで出てきた例にもあまり見られなかった使用であり、特殊な感じがする。ここに挙げなかった例を見ても、Fのスズロがかかる語は、失ス、身ヲ離ル、引キ忍ブ、寒シ、穢ラヒ、アイナシ、涙グマシ、恐ロシゲナリ、(心方)浮カブ、覚束ナシ、心ボソシなど、決して明るく快い感じを与えない。(注4)

よつて、スズロは、これまでのA〜Eまでに述べてきたことを考え合わせても、基本的にはマイナスイメージの語と併用されるものであったように思われる。

続いて、Gについて見ることにしたい。

。「すゞろなるものになにか多く賜はむ。」など、ある人々にいひければ・・・

△大和・一四八▽

。北の方、げに我が子供男女あれど、男子はすゞろなるに、我が為、はらからのためする、いと有がたとしと、やうや

う思ひなる程に、年帰りぬ。

△落窪・四▽

。御びづら結びて下りさせ給へるは、すゞろなる人だに涙とゞまらず。

△栄花・四〇▽

。あはれにいとほしき物に思はれて、すゞろなる人の手より物を多く得てけり。

△古本・五九▽

Gのスズロは右に記した四例がすべてである。これらはいずれも「人」を修飾する連体形スズロナルとして用いられ、「かかわりのない」とか「無関心な」の意を示している。用例は少ないが、前号の『源氏』に出て来た用法ともよく似ていて、特にこれと言った問題はない。

最後のHも用例が少ないので、全部掲げることにする。

。すゞろに「うたよめ」とのたまひければ・・・

△大和・八六▽

。年の覚ゆるまでさる事のなきを思ひ歎きし程に、すゞろなる人いできて、二つなく時めきて、子をたゞ生みに生めば、これにこそはあめれ。

△宇津保・國讓下▽

。心のうちには「すゞろなる身のありさまかな」とうち思ひつづけ・・・

△寢覚・三▽

。すゞろに見奉る人、いと笑ましう思ひ奉るべし。

△栄花・三▽

。僧 男ノ昇ル後（シリヘ）ニ昇ルニ、スゞロニ高々ト昇ラル。

△今昔・一九〇三三▽

。「手もあらばや」と思へば、すゞろに出で来。

△古本・六八▽

。行方も知らぬ山にすゞろにてあり、心ながらいとあやしく……

△とり・中▽

Hは、意外だと驚くときに用いる点で、Bとよく似ている。ただし、Bが、その結果不快に感じるのに対し、Hは必ずしもいやだとは感じていない。右の七例の場合も、連用形用法であれば、「だしぬけに『歌を詠みなさい』とおっしゃった」（『大和』）、「思わず高々と木に昇った」（『今昔』）、「『人手が欲しい』と思うと、いきなり人が出て来た」（『古本』）など、その驚きが予想外に大きいことを言うときにスズロを用いている。また、連体形用法の場合も、懐妊ということが久しいことなかったのに、「思いもよらぬ人〔藤壺〕が現れた」（『宇津保』）とか、「思いがけないわが身の有様だなあ」と「寢覚上方」自らの運命を思い続ける「（『寢覚』）など、その意外性にとまどいはしているが、不快にまでは感じていない。右に訳出しなかった『栄花』や『とり』の場合も、スズロは、単なる驚きと取ることが出来るので、Bとの相違がはっきりと認められる。要するに、予期しなかったことが出現し、その意外性に驚くのがHのスズロである。

以上、A～Hまで中古の作品におけるスズロの意味・用法について述べて来た。ところで、今回調査してみた結果、前号で取り挙げた『伊勢』『枕』『源氏』には見られなかった新しい意味のスズロが出て来た。以下、煩雑にはなるが、右の八つの意味グループのどれにも当てはまらないものなので、あえてもう一つここに加えることにする。なお、これは、どういうわけか『宇津保』に例が多かったので、その中の一つを抜き出し、説明を加えることにしたい。

。「実忠か」このあて宮に御心つき給ひて、「いかで聞えん」とおぼせど、父おとゞに聞え給ふとも許され給ふまじく、忍びてあて宮に聞え給はんもすゞなるべければ……  
△宇津保・藤原の君▽

右は、十二歳になり、裳着も済ませたあて宮に実忠が懸想するところである。あて宮を気に入った実忠は「この気持ちはどうして伝えよう」と思案する。父の正頼に申し上げても許されそうもない。そこで、「誰にも知らせずそと当

人のあて宮にいう」のはどうだろうか考える。しかし、それは「すずろなるべければ」と、ここでスズロを用いている。つまり、この部分、あて宮に直接気のあることを伝えるのも、実忠にとって、いかにも「軽々しくはしたくないように思われるので」と訳すことが出来る。よって、スズロは「思慮のない様子」について言い、「軽率である」とか「はしたない」の意を表している。これは今までに出て来なかったスズロの意味・用法なので、新たにIとして、追加することにした。

I・・・(思慮のない様子、考えの浅いさまを言い)軽率である、軽々しい、はしたない、恥ずかしい

なお、このIは、『宇津保』にあと八例見える他、『寝覚』『とり』にも出て来る。そのうちのいくつかを、左に記しておくことにしたい。

。「さわがしなど物し給はん、すずろなる事なれば、うたておぼさんやなどとてなん。」  
△宇津保・菊の宴▽

。中将「なごてか、仲忠は人のすずろなりと思はむことはきこゆべき。」  
△宇津保・初秋▽

。「すずろなる。そこの御かたきひきいでんといふかな。」  
△宇津保・蔵開中▽

。さてのみあらんも、いとすずろに、宮の御有様もおぼつかなからぬにはあらぬに・・・  
△寝覚・四▽

。「すずろなるやうなりとも、いかゞはせん」と思ひておはしたれば・・・  
△とり・上▽

右は順に「アテ宮へ絶エズ御消息スルコトハ」不良などとお思ひになるだろうかとはしたくない事でもあるので、片腹痛くお思ひになるだろうと存じまして「どうして私「仲忠」は人がはしたないと思うようなことはお勧めななし

「ましようか」「軽々しい事だ。そなたの敵を引つ張り出して来ようというわけだな」「そうしてはかりいるのも誠に思慮深くないことだし、女一の宮の御容態も不安でならないので」「『軽率なようであっても、どうしよう』とと思って「中納言ノ所二」いらっしやったところ」と訳すことが出来る。よって、スズロはいずれもIの意を表している。

以上、長々と中古の作品におけるスズロの意味・用法について述べて来たが、それは実に多岐にわたるものであった。以後これらが、次の中世に入るとどのように変わって行くのかについては、紙数の関係で、次号に回すことにしたい。なお、今号の締めくくりとして、最後に調査の対象とした作品におけるスズロの意味別用例数を掲げ、大方のご叱正を期待して、この辺で筆をおくことにしたい。

△中古の作品におけるスズロの意味別用例数▽

落窪物語				A
大和物語		二	一	B
伊勢物語		一	一	C
	一			D
				E
				F
一	一			G
	一			H
				I
一	三	四	一	計

狭衣物語	更級日記	夜の寢覚	浜松中納言物語	堤中納言物語	紫式部日記	源氏物語	和泉式部日記	枕草子	宇津保物語	蜻蛉日記
		一	三			三	一			一
						一			三	
	一	一			一	二			二	
	二	五	五	一	二	一八		六	二	
			五	一		一四		五	一	
一		四	一四			八		三	一	
						三				
		一				一			一	
		一							九	
一	三	一三	二七	二	三	五〇	一	一四	一九	一



2 Bには他に、「すゞろに思ひの外なる所に有りて御ために心ざしなき様に見え奉る事」△宇津保・國譲上Vという例がある。これは「不覚にも考えていかなかった所に「女一宮ヲ北方ニシテ」住むようになって、藤壺への自分「仲忠」の志が変わったように思われること「ガ残念ダ」と訳せるので、連用形用法ではあるが、スズロニをBにとることが出来る。

3 『栄花』のこの例は、スズロニが「笑ましよう」にかかっているとも考えられる。本稿では、「思ひやらる」にかかるものとして取り扱ったが、いずれにしろ「笑ましよう」はブラスイメージの形容詞である。よって、Dの大半が悲シ、哀シナリなどマイナスイメージの語にかかって行く例が多い中で、珍しいものといえる。

また、ここには挙げなかったが、「火が出た」△栄花・一六V、「戸がギーツと鳴って開いた」△今昔・二六ノ八Vなど自然発生的なものについて使われたスズロニもDに含めて考えた。

4 Fには、もう一つ、「いと見まほしき心さまのすゞろに恋しく侍れば」「めでたくあはれにかなしきまですゞろに思はしう思ひきこえついたる人にて」という注目すべき例がある。どれも『寝覚』巻三に見え、それぞれ「会ってみた」「寝覚上ノ」性質がむやみと恋しゅうございますので、「すばらしいと、しみじみいとしいまでにやたらに好意を感じるようになった人」と訳すことが出来る。スズロニは「恋し」「思はし」という必ずしも暗く寂しい感じを与えるものではない語にかかっている。『大鏡』の例も合わせ考えると、Fはいい意味でも悪い意味でも、程度が甚しければ、用いたようであるが、その例はかなり少ない。